

Try it！

百合野 正博	同志社大学商学部教授
奨励者紹介【ゆりの・まさひろ】	【研究テーマ】 説明責任を負っている集団の提供する情報の検証の重要性について

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

(マタイによる福音書 七章七一八節)

最近ショックだったこと

私が初めてチャペル・アワーの奨励で話す機会を得たのは一九九八年の秋でした。今でもそのときのことを思い出することができます。商学部の教員である私がチャペル・アワーで話をする機会なんかないと思っていましたから、嬉しくて、嬉しくて、はやる気持ちを抑えながらお話をしました。印刷されたものを読むと、その日の興奮がよみがえってきます。

今日も、実はそのときの気持ちに近いのです。少し気持ちが高がっています。それは、この同志社礼拝堂で奨励をするのは今日が初めてだからです。学生支援センター所長の役目として、三月の体育会表彰式でスピーチをした経験があります。しかし、チャペル・アワーの奨励はまた格別です。その証拠に、いつもはメモ書きの原稿が、今日は、こうして完成原稿になっています。

なぜ完成原稿を用意したかと言いますと、いい歳をして口から出任せ（ではないのですが）の軽い話をするのではなく、ちょっとは奨励らしい話をしなければならないと思い知らされた出来事が最近あったからです。

ひと月ほど前、住宅ローンの借り換え手続きの最後になって、ローンとセットになっている生命保険が承認されませんでした。ということは、生命保険会社はローンの残り期間の十四年以内に私が死ぬと判断したということです。三月二十一日、卒業式の夜の謝恩会ではしゃぎすぎたためか、その夜中に二回目の発作があった心房細動が障害になったようです。私自身はいたって健康だと思っていますが、客観的に見るとそんな状態なのだ、と思い知らされました。

この春学期の水曜チャペル・アワーの統一テーマは「人生において大切なこと」だそうです。新島先生よりもすでに十年長く生きてきている私には、このテーマに関連したお話をする責任があるのではないかと、そう感じました。今日は、真面目に、このテーマに取り組もうと思います。

もう一つ、最近ショックだったこと

最近、もう一つ、「え？」と思うような経験をしました。

ある大学院生が、「就職の内定ももらったし、単位も十分過ぎるほど取ってあるので、夏休みにはヨーロッパに行こうと思っています」と言うので、どこに行くのか聞きましたら、「まだツアーのパンフレットを十分に検討していないのははっきりしたことは言えません」と言うではありませんか。びっくりして、「バックツアーで行くの？観光旅行？」と聞き返しましたら、向こうも、「え？」という感じです。「社会人になったら長期休暇は取れないんだから、往復の航空券だけ買って、その日の気分で放浪してきたらいいじゃないか」と言いましたら、「ツアーで行かないと危ないじゃないですか」と言い返されました。

私の学生時代には、小田実の『何でも見てやろう』ばりに、世界中を貧乏旅行することにあこがれたものです。ですから、『地球の歩き方』か『一日一〇ドル世界の旅』（確かそういう名前だったと思うのですが、今は見なくなりましたね）といったガイドブックと、『トマスクックの時刻表』を用意して、南回りの安い航空券（と言っても、今よりもずっと高かったのですが）でヨーロッパに行く、というのが定番でした。昨今のように労働ビザが厳しくありませんでしたから、皿洗いをして生活費を稼ぎながら放浪をし続けた人もたくさんいました。でも、その当時は、ドルは高かったし、外貨の持ち出し制限も残っていましたから、おいそれとは海外に出て行けませんでした。

テレビのクイズ番組のキャッチフレーズが、「十問正解して、さあ、夢のハワイに行きましょう」でした。夢のハワイ、ですよ。この当時、バックツアーで海外に出かけるのは、悪名高き農協のおじいさんおばあさん、学生はバックパッキングを担いで自由旅行、と相場が決まっていたものです。

自分で動き回るのは危ないのでバックで海外に出るなんて、いつから学生の安全志向は高まったのだ？とクエスチョンマークがいくつもつきました。

若い学生諸君の保守化傾向

そう言えば、昨今、学生諸君がずいぶん保守的になったような気がします。自分で何かをすると言うよりも、どちらかと言えば、受け身ですね。自分から進んで判断するのではなく、寄らば大樹の陰、安全なところに自分の居場所を見つけようとしているように見えます。

就職活動で企業を選ぶ基準は、将来性・可能性よりも、安定性・安全性。たぶん、大学を選んだ基準も、同じだったのではないのでしょうか。自分の偏差値にあった大学の中から、一番安定していると思われる大学を選ぶ。同志社が選ばれる大学の一つだというのは嬉しいことですが、でも、同志社の建学の精神や中身を高く評価してもらっているのではないかもしれない、というのは少し寂しいですね。

入学後も、みんなが選択する科目を選択する。みんなが入るようなサークルの一つを選んで、自分も入ってみる。授業にも、みんなが出席するので、自分も出席する、という感じですね。学生時代を振り返ってみて、出席する値打ちのある授業にしか出席しなかった身としては、毎年、年度初めに、「本当にこの授業に出たいと思って出席しているんですね」と念を押してから授業を始めるのが習わしになっています。

ということで、友だちが誰も出席しないので、チャペル・アワーには目が向かない。今日、ここに来てくれた学生さんは、一体どのような動機があったのか、あとで聞いてみたいものです。

でも、他人（ひと）と違うことをするのは、そんなに勇気のいることでしょうか。また、そんなに大きなリスクがあるのでしょうか。

私はどうだったか

私の意思決定を少し振り返ってみましょう。

私は経済学部をけて商学部に入りました。一九六九年当時、経済学部は同志社の看板学部でしたから、私が商学部に行くと言った友だちは、一人の例外もなく、「やめとけ、商学部なんかに行ったら就職できひんで」と本気で忠告してくれました。でも、私は会計士になるつもりでしたから、迷うことなく、そのためのカリキュラムが整っている商学部を選びました。

結果は、商学部を選んで正解でした。商学部の専門領域は幅広いし、教授陣はユニークだし、学生も多士済々。映画『パッチギ！』でオダギリジョーが演じた同志社大生はまさにあのころの商学部の学生の一つのタイプでした。私のゼミでは、三回生のEVEのころには皆内定をもらっていました。しかし、私は就職せず、大学院に進みました。

大学院への進学は、一大決心を必要としました。今のように大衆化した大学院とは違い、大学院に進むということは、もう、企業に就職したり、適齢期に結婚したりすることはあきらめなければならない、「普通の人生は捨てなければならない」という選択肢でした。

結果は、大学院に進んで正解でした。それまでの長い目標だった会計士ではなく、研究者、大学教授になるという新しい道が開けたからです。

研究者の道を歩み出してしばらくして、留学の機会がありました。この当時、会計学や監査論を研究している人はたいてい、アメリカのイリノイ大学やシカゴ大学に留学したものです。この二つが会計学研究のメッカでした。しかし、私はイギリスに留学しました。

結果は、イギリスに留学して正解でした。イギリス社会で暮らしているうちに、会計学や監査論が国民に高く評価されている社会の特徴が全身にしみ込んだからです。ひと言で言うと、イギリスはまさに主権在民の社会であって、その主権をもっている一般の人びとに必要なかつ十分な情報が提供されていて、その情報の信頼性をチェックするメカニズムが社会システムに組み込まれているのです。この経験をもとに、自信をもって学会での研究発表をすることができるようになりましたし、視点の定まった本を出版することもできました。

私の研究上一貫している主張は、非常に簡単に言いますと、説明義務を負っている人たちはきちんと説明しなければいけないし、説明される側は説明を聞いて監視する責任を果たさなければならないし、説明されている中身が正しいかどうかをチェックする専門家もパブリックの立場に立って自律的にその社会的責任を果たさなければならない、ということです。そしてこの、英語で言うと、アカウントビリティーと、モニタリングと、プロフェッションによるチェックシステムは、伝統的に考えられてきている概念よりもずっと幅広い領域で社会のシステムに組み込む必要があるのです。

しかし、私の主張は、発表当時は、あまり高く評価されませんでした。死後に評価されるようになった芸術家がたくさんいますから、私もその一人かと、半ばあきらめかけていたのですが、ここ数年、アメリカのエンロン事件やワールドコム事件以降の監査の領域での新たな動きが、三十年來の私の主張が正しかったことを証明してくれました。本質を見失わないで研究を続けてきて良かったと、しみじみ感じています。

私は、このように、みんなとは違う意思決定をしてきましたが、でも、失敗したらえらいことになる、そんなに大きなリスクを冒してきたように感じたことはありません。もしも意思決定が間違っていたら、最悪の場合、商学部はごみ溜めで、大学院は魍魎（ちみ）魍魎（もうりょう）の住む袋小路で、学会からはつまはじき、講義を聞く学生がほとんどいない、という結末だってありえたのです。しかし、現実には、そんな悲惨な状況におかれることはなく、他人（ひと）と違うことをしてきたことが、毎回自信をもって持論を展開する講義につながり、またこのような機会を得て、今日こうして皆さんとお話しをしていることにつながっているかと思うと、これまでのところ、結果オーライだったように思います。

身近なところにいる、勇気をもって行動したひと

でも、他人（ひと）と違うことをするのにもっとレベルの高い勇気が必要とする場合もありますし、また、死と隣り合わせの大きなリスクが伴うことがあるのも事実です。私たちの身近に、その実例があります。

そろそろ出るころだと思っていた、と言う人がいるかもしれませんね。出るといっても、幽霊ではありません。私がチャペル・アワーで話をする場合には、どこかで新島先生が出てくるということになっています。こうして胸ポケットにも新島先生がおられるのです・・・このストラップ、気がつきましたか。

さて、同志社科目で聞いた人もいるかもしれませんが、新島先生の行動は、「ちょっとやってみよう」では済まされないほど勇気のいることで、またリスクの大きいことでした。情報のあふれ返っている今なら、自分の知りたいことを知るのとはそれほど難しいことではないでしょう。でも、私が皆さんと同じ年頃ですら、このキャンパスで情報を手に入れるのは簡単なことではありませんでした。

たとえば、図書館。その図書館が建つまでは、今の光塩館のところにあった閉架式の図書館がメインでした。閉架式というのは、本棚に並んでいる図書を手に取って、その場で中身を確認してみることはできません。カードで整理番号を調べて請求票に書き込み、カウンターの担当者にそれを手渡して書庫から出してきてもらうのです。出てきた本が自分の求めているものでなかったら、すぐに返却して、また一からやり直し。

ですから、コンピュータのなかった時代に、私の一番欲しかったものは、百科事典でした。結婚記念に平凡社の世界大百科事典を、その西門の向かいの古本屋さんで買ったときの嬉しかったこと。今でもはっきりと覚えています。百科事典には調べたかったことは何でも載っていたような気がします。今はインターネットで検索をしたら膨大な情報がすぐに手に入りますね。

でも、新島先生が生まれ育ったのは江戸時代末。安中藩の江戸屋敷の中です。四四三九坪の広さだったといいますが、正方形なら一〇メートル四方。子どものころ、新島先生は、その堀で区切られた空を見ていたので、空というものは四角いものだと思っていたのだそうです。

そして、世は鎖国。海外の情報が簡単に手に入る世の中ではありませんでした。

しかし、このように非常に制限された環境で読んだオランダの本や漢訳のアメリカの本、そして部分訳の聖書の影響を受けて、新島先生は、アメリカに行こう、と決心をするので。將軍の子どもが將軍になる国はおかしい、みんなで將軍を選ばアメリカという国に行ってみよう、キリスト教の考え方を学んでみたい、と思い詰めるわけです。今はどうでしょう。国会議員の子どもや孫が国会議員になることを何とも思わない人が多いですよね。

アメリカに行くといっても、バックツアーじゃないですよ。添乗員が付かないどころか、鎖国ですから見つからないように脱国しなければならない。密出国の手助けなんて、どこで、誰に頼めばいいのでしょうか。しかも、密出国がバレたら、死罪です。失敗した時点で、自分の人生はおしまい。これほど大きなリスクはないでしょう。

新島先生は、それほどのリスクを冒してまで、アメリカに行こうと決心し、それを実行したのです。

密出国した後も、当然、順風満帆ではありません。日本に戻るまでの新島先生の並大抵でない勉強を中心とするさまざまな努力、あるいは、日本に戻るにあたって、ラットランドのグレース教会でのアメリカンボードの年次総会で行った涙声ともに下るスピーチと、帰りの汽車賃の二ドルを寄付した老農夫のエピソード、そして、帰国後、ここに同志社をつくるまでの困難さなどについては、ぜひ本井先生の本を読んで、知ってください。

私のここでの役割は、新島先生の一部始終について語るのではなく、新島先生について知識を得てみようという気持ちを持ってもらうような刺激を与えることです。

そして、今日のテーマ

話は全く変わりますが、イギリスに留学していたとき、イギリス人に向かって、私はしょっちゅう「Try it! 」と言っていました。「食べること」に対して保守的なイギリス人に、魚を食べてみたらとか、ステーキを焼くときには醤油とニンニクを使ってみたらと勧めるときに、使った決まり文句です。

一九九〇年ころ、イギリス人は生魚をほとんど食べませんでした。「Try it! 」と勧めても、手を出す人はほんの一握りでした。しかし、二〇〇〇年にロンドンに行ったときにびっくりしたのですが、大きなスーパーのサンドイッチ売場の七割くらいが「バック寿司」に変わっていました。たった十年足らずで、イギリス人は生魚を食べるようになったのですね。今では、あちこちにスシバーや回転寿司店があると聞いています。

勇気をもって「やってみる」ことが大きなうねりをもたらすことや、劇的な社会的変革をもたらすこともあるのです。私は、これまでの人生経験から、「一人ひとりの人生において大切なこと」は、何事にも勇気をもってトライしてみることだと思っています。

命を懸けて自分の知りたかったことにトライし、日本国民の教育のためにはどうしても私学同志社大学を設立しなければならないと強く思い続けた校祖によってつくられた、この同志社大学で学ぶ若い人たちが、すでに十分もっているはずの知識を頭の中で咀嚼して、その時々に行動しなければならない対象を見つけ出し、そして、勇気をもって実際に行動に移すことを期待したいと思います。

「Try it! 」「やってみよう! 」

二〇〇七年六月十三日 同志社スピリット・ウィーク

水曜チャペル・アワー「奨励」記録